

平成30年12月26日(水)

### ハムスター

ハムスターを飼ったことがある。一匹の白いオスのジャンガリアンハムスターを子供がもらってきた。ゲージを買ったり走り車を備えてみたり、ひまわりの種をいくつか与えていると、種をほおぼった顔つきが何とも言えず、かわいいものだと思うようになった。

それにしてもえさを与えすぎたのか、おなかが大きくなってきたところ、いつの間にか巣作りをするようになって、ある日子供が4匹巢の中にいるのを発見した。

青天霹靂、実はハムスターはオスではなく、お母さんになっていたのである。そのうち5匹がケージの中にごめくようになり、子供のうち3匹を磐城高校の先生方に子供さんがいる人に声をかけ、引き取ってもらった。

うちに残った二匹は、ゲージのほかにタンスケースを買い、その中で飼育することになった。お盆や正月に妻と子供たちが出かけることになっても、ハムスター係の私は家に残ってえさを与える係をすることになった。

夜、6畳の部屋にハムスターを開放すると喜んで端から端まで走り回る。それがなんともおもしろい。時にどこかに行ってしまうと困ったところ、ベランダの隅で発見したり、ゴキブリホイホイに引っかかって、はがすのに苦労したり、言っていない失敗は枚挙にいとまがない。

一番の失敗は、その死が訪れたときに、子供たちに見せないようにして葬ったことである。あのつややかだった毛並みがぼさぼさになり、柔らかかった身体が硬直して目をむき出しているその姿を見せなかったことが今一番悔やまれる。

いつか訪れる生物の死を体験することは非常に重要なことだ。もしかしたら、ペットを飼っていることの本当の意味かもしれない。

自分が子供の時に飼っていた白い犬が、亡骸になった時に一輪車に入れて畑の隅に葬ったのは飼いたいと犬を連れて来た弟だった。命にはいつか終焉が訪れるのを子供心にも目に焼き付けることは大事なことだ。想像力の源泉は体験だ。体験しないものは、人は結局分からない。子供たちに、ハムスターの最期の姿を見せるべきであった。そして一緒に葬ることが大切なことだった。

これから、ペットを飼うつもりは今のところはない。犬でも飼うかと思ったことはあるが、その最期を看取れないと申し訳ない。自分の世話が大変なので、ペットどころではないとも思う。それでも、命の輝きがそばにあると生きる糧として重要なことは十分わかっている。せめて、生きとし生けるものへまなざしを向けながら毎日を過ごそうと思っている。

